

論文の和文要旨

論文題目 アフリカン・アメリカン文学における
 アメリカ的精神

氏名 荒 このみ

提出論文の構成

第I部 アフリカン・アメリカン・イデオロギー

第II部 アフリカン・アメリカン・ドリーム

本論文「アフリカン・アメリカン文学におけるアメリカ的精神」において論証をこころみしたのは、まず第一にアフリカン・アメリカンの存在がアメリカ文学の積極的な構成要素としてあるということである。第二にアフリカン・アメリカン文学はアメリカの土壌およびアメリカの精神を滋養にして育まれてきたということである。

その認識はいまのところ十分に浸透してはいないが、アメリカ文学の未来を考えると、もはやいつまでもアフリカン・アメリカン文学を除外したり、あるいは特殊化しておくことはできない。アフリカン・アメリカンという呼称の問題、および「レイス・リテラチュア」、「ニグロ・リテラチュア」、「ブラック・リテラチュア」というアフリカン・アメリカン文学の括りかたに明らかなように、アメリカ文学研究には特殊化と排他の傾向が激然としてある。除外や排他の姿勢を貫くことでかろうじてアメリカ文学の特殊性を保持しようとするのであれば、アメリカ文学は「貧しい」文学になる。現状に満足しそこに停滞するのではなく、現状を頑固に否定していくなかから未来の土壌が培われていくのであり、新しい要素を吸引しつつ生き延びていくアメリカ社会の性向が、アメリカ文学の特質にもなっている。そしてその一翼を担っているのがアフリカン・アメリカンの存在であるということを本論文では強調した。

第I部「アフリカン・アメリカン・イデオロギー」では、アフリカン・アメリカン文学がアメリカ的精神土壌にいかにか深く依拠しているかを論述している。考察の中心にラルフ・ウォルド・エリソンを置いたのは、エリソンが二〇世紀後半を代表するアフリカ

ン・アメリカンの作家であるばかりでなく、エリスンの唯一の長編作品『見えない人間』ならびに、エリスンの文学者としての精神的・社会的行動が次世代の多くのアフリカン・アメリカンの作家に強い影響を与えているからである。

エリスンが生前に出版した長編作品は『見えない人間』のみであったかもしれないが、この作品一作にアメリカ社会におけるアフリカン・アメリカンの抱える問題や、かれらの複雑な精神状況がさまざまな形をとってあらわれていると考える。『見えない人間』に描かれているアフリカン・アメリカンの状況、かれらの抱える問題を抽出しながら、さらにそれらが二〇世紀における他のアフリカン・アメリカンの作家による作品において、いかなる共通項を形成しているのかを分析した。このような作業を通して今日のアフリカン・アメリカン文学の状況を具体的に論じている。

ラルフ・ウォルド・エリスンは、そのファースト・ネーム、ミドル・ネームを一九世紀の思想家ラルフ・ウォルド・エマソンと同じくするが、「アメリカ人」であるエリスンはアメリカの思想形成において重要な役割を担ったエマソンの考えに共鳴し、その思想を自分の精神の糧にしていった。エマソンが主唱した個人主義、「自己信頼」、民主主義の概念が、アメリカ社会で差別されるアフリカン・アメリカンのエリスン個人に精神の基盤を与えてくれたのである。そればかりでなくエマソンの思想はアフリカン・アメリカンのエリスンに精神の自由な発露を保証してくれたのであった。

後に続く多くのアフリカン・アメリカンの作家はそのようなエリスンに信頼の念を寄せ、エリスンの文学およびエリスンの文学者としてのありかたに役割模範（ロール・モデル）を見出した。エリソン文学の重要性とアフリカン・アメリカンであるエリスンのアメリカ社会における存在の秘密と意味を探求することは、アメリカ文学の豊かさとかを認識することになると私は考えた。

以上のような背景のもとにラルフ・エリスンの『見えない人間』を分析した。作者がこの作品で描き出したことはアフリカン・アメリカンの特異性の強調ではなく、アメリカ社会の基本的な理念である民主主義であり、主人公を通して「自己信頼」というアメリカの基本的精神を語らせているということを論述した。その過程でエマソンの著作に繰り返し戻りながらエリスンへの影響を確認し、『見えない人間』という表題における「見えないこと」にこだわりながら、「見えること」および「見ること」とアメリカ社会におけるアフリカン・アメリカンの存在を関連づけて考察した。

エリスンより前の世代のアフリカン・アメリカンで、エリスン文学とのかかわりにお

いて論及すべきであると考えた代表的な作家としてリチャード・ライト、ジョージ・S・スカイラー、W・E・B・デュボイスを取り上げている。ライトについてはアフリカン・アメリカンとしては同胞であるかもしれないが、けっしてライトの延長線上にエリスンがいると解釈してはいけないこと、スカイラーの『ブラック・ノー・モア』は諷刺作品ではあったが、エリスンの可視性と不可視性という肌の色にかかわる根源的な問題を同様に主題にしていること、デュボイスの唱えた「カラーライン」とアフリカン・アメリカンの二重性の問題は、今日においても解決不可能な「レイシャル・ディヴァイド（人種分離）」の問題と絡んで、エリスンにおいても深刻な問題であったが、エリスンは「二重性」の意識ではなく、より自信に満ちた自由な融合の可能性を認め、「アメリカ人」である自分を強く打ち出しているということを論じた。

『見えない人間』の「見えない」状況に関連して、「見える暗闇」や白人や黒人が相互に抱きあう「恐怖」の感覚、文学的表象としての「黒い仮面」などについて、グロリア・ネイラーや ジャメイカ・キンケイド、エントザケ・シヨンゲの作品や戯曲を分析しながら論じた。肌の色の曖昧性が生み出すアメリカ的問題をチャールズ・チェスナットやネラ・ラーセンの「パッシング」小説のなかに読み取り論じるとともに、いっぽう「社会的白人」として「パッシング」するためには都会の隠蔽性が条件であったことを示し、アメリカ社会の工業化によるアフリカン・アメリカンの都市への人口流入という歴史の変遷が「パッシング」の問題を生み出したことを指摘した。一九一〇年代に始まるアフリカン・アメリカンの北部の都会への移動、「グレート・マイグレーション」という社会現象はそれをテーマにした「マイグレーション・ナラティヴ」を誕生させた。アフリカン・アメリカンの「パラダイス」願望の視点から「マイグレーション・ナラティヴ」を論じ、「マイグレーション」の衝動は一七世紀のアメリカ植民地建設のときに始まる歴史的にアメリカ的衝動であることを提示した。

『見えない人間』の主人公が人生の転回点を迎えた場所は黒人大学であった。黒人大学を舞台にした作品は他のアフリカン・アメリカンの作家、アリス・ウォーカーやネラ・ラーセンなども書いているが、白人の援助により後押しされた黒人大学は、アフリカン・アメリカンの精神形成において「曖昧な」トポスになることを指摘し論じた。「ピラヴド・コミュニティ（愛される共同体）」という「パラダイス」願望はジョサイア・ロイスにより提唱され、一九一〇年代に白人の社会学者たちが大いに論じたところであるが、それはマーティン・ルーサー・キング・ジュニアなどアフリカン・アメリカンにも大い

に影響を与え、「よき共同体」建設への願望がアメリカ的精神でもあることを確認した。

文学的方法としてこれまでアフリカン・アメリカンの音楽および文学の特徴とされてきた「インプロヴィゼーション(即興)」という表現形態は、かならずしもアフリカン・アメリカンのみに認められる特質ではなく、アメリカ社会に特有の衝動ではないかと考えた。歴史的に見るとアメリカ社会の成り立ち自体が「インプロヴィゼーション」によるのであり、アメリカは「プロセス」の状況こそが常態の社会なのである。『見えない人間』の祖父の遺言の「原理」とは民主主義であると考え、民主主義によって営まれる社会はサクヴァン・バーコヴィッチの唱える「プロセス」の社会になる。第I部を「アフリカン・アメリカン・イデオロギー」というタイトルで括ったのは、バーコヴィッチの「アメリカン・イデオロギー」になぞらえ、アメリカ文学を語るにあたりアフリカン・アメリカンの存在を含めた作業イデオロギーになると考えたからである。

第II部「アフリカン・アメリカン・ドリーム」では、一七世紀のアメリカへの植民者が抱いていた約束の地としてのアメリカ像、いわゆる「アメリカの夢」を中心的な理念に据え、それがアメリカ社会におけるアフリカン・アメリカンに適用されたときには「アメリカン・ドリーム」と表裏をなすように「アフリカン・ドリーム」という異型を生み出していったことを分析した。

「アメリカの黒人」の誕生には奴隷船が介在しているが、この特殊な領域をアフリカン・アメリカンの象徴的なトポスとして捉え、それがアフリカン・アメリカン文学ではどのように取り上げられているのかを検討した。アミリ・バラカの戯曲やチャールズ・ジョンソンの『中間航路』は奴隷船が舞台になっている作品である。その他都会の特殊な地理空間の地下鉄や酒場などを舞台にする作品を分析し、アフリカン・アメリカンの意味を探求した。またボールドウィンが文学に昇華した音楽演奏の「インプロヴィゼーション(即興)」という技法は、イシュマエル・リードの『マンボ・ジャンボ』における「ジェス・グルー(自然発生)」という発想と関連し、きわめてアメリカ的現象であることを論じた。

アフリカン・アメリカンには「空を飛ぶ」という飛翔願望があるが、それは「川の向こう」という自由希求と重なり、現実を越え「境界」を無視することにつながる。究極的には「アフリカへの帰還」というアフリカン・ドリームになってあらわれるこのアフリカ幻想をハーレム・ルネサンス期の詩人・作家たちによる作品を通して分析した。そ

の「アフリカ幻想」は、白人社会が生み出した黒人の「マミー」の特殊化とも深いところでつながり、女の性の搾取という観点からセクシュアリティの問題を論じた。

第Ⅱ部の最後の章の大半をトニ・モリスン論に割り、『パラダイス』で描き出していた「アメリカの黒人」にとっての象徴的な「南部」の意味を探求した。楽園への意志をマーティン・ルーサー・キング・ジュニアは「私には夢がある」という演説で表現し、「自己愛(セルフ・ラヴ)」の尊厳を強調したが、自己否定の傾向のあるアフリカン・アメリカンにとってそれが力強い精神的支えになり、「自己信頼」の意味を知る契機になったことをチャールズ・ジョンソンの『小説・夢見る人』を検討材料にしながら論述した。

第Ⅱ部を「アフリカン・アメリカン・ドリーム」という総タイトルで括り、アフリカン・アメリカンの抱く複雑な「アメリカの夢」を検討した。かれらは「アメリカの夢」を抱きながら、「アフリカン・ドリーム」である幻想のアフリカを思い続けたが、それはかれらの生き延びる力の表出でもあることを認識した。

第Ⅰ部の「アフリカン・アメリカン・イデオロギー」と第Ⅱ部の「アフリカン・アメリカン・ドリーム」を通して、アメリカ的精神がいかにかにアフリカン・アメリカン文学を貫いているか、そしてアフリカン・アメリカン文学がいかにかにアメリカ文学を構成しているかを分析し論述した。